

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00529

研究課題名（和文）震災後文学の研究と国際研究ネットワークの構築

研究課題名（英文）Study of Post Disaster Literature and the international study networking

研究代表者

木村 朗子（Kimura, Saeko）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：80433879

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：2011年3月11日に発生した東日本大震災は、文学、映画、アートなどさまざまな文化活動において思考されつづけてきた。世界の日本文学研究者で、震災後文学に取り組んでいる研究者で共同国際学会を開催し、研究会の成果を『世界文学としての 震災後文学』（明石書店、2022年）としてまとめ出版した。また木村朗子の『その後の震災後文学論』（青土社、2018年）が共同研究者である、ダグラス・スレイメーカー氏、レイチェル・ディニット氏によって英語訳され2022年に出版された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、東日本大震災を受けて書かれた小説、詩などの文学作品を中心として国際的に共同研究を進めてきた。現在では、震災後文学論で修士論文、博士論文に取り組む若手研究者も増えており、当該研究において国際会議を公募で進めていくことが後進の育成にもなっている。震災後、12年が経過しているが、芥川賞に震災後文学が選ばれるなど文学界での影響はなおも続いている。本研究を今後も進めていく必要がある。

研究成果の概要（英文）：The Great East Japan Earthquake that occurred on March 11, 2011 has been considered in various cultural activities, including literature, film, and art. We held an international conference in collaboration with scholars of Japanese literature from around the world who are working on post-disaster literature, and published the results of the conference in a book. Saeko Kimura's book was translated into English by Rachel Dinitto and Doug Slaymaker and published as Post-Disaster Literature in Japan: Revisiting the Literary and Cultural Landscape After the Triple Disasters.

研究分野：文学

キーワード：震災後文学 日本文学 文学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

震災後文学とは、2011年3月11日に起きた東日本大震災の影響下に書かれた文学作品を意味しており、2011年以降に成立したあたらしい文学ジャンルであり学問ジャンルである。申請者は、東日本大震災の影響下につくられた映画、演劇、美術も含めて「震災後文学」と呼んでおり、それは文学にとどまらない広く文化的な事象である。たとえば、現在、どんな美術展に行っても東日本大震災の影響下にある現代美術の作品展示があるように、文学においても震災後文学は一ジャンルを確実に築いたといえる。

2. 研究の目的

海外の多くの日本文学研究者は、東日本大震災を受けて書かれた文学作品を積極的に授業でとりあげた。かつその研究者たちは、震災後文学の作品についての論を多く発表してきた。その結果、震災後文学が研究のテーマとしてジャンル化されることとなり、現在は、震災後文学を研究テーマに掲げて博士論文に取り組んでいる大学院生が多くいる状況にある。現在も次々と新しい作品が生み出されており、震災後文学の研究は持続的に行われる必要がある。

3. 研究の方法

本研究はフランスを拠点とするところに独自性がある。ヨーロッパはチェルノブイリ原発事故の記憶が濃厚で東日本大震災への関心がとくに高い。日本文学研究の媒介言語は、日本語または英語だが、アンヌ・バヤール=坂井氏と研究協力関係にあることでフランス語圏を視野に入れることが可能となった。フランス語文学には、東日本大震災を受けて書かれた小説作品が多く存在する。またドイツ語文学では、東日本大震災を受けて、新たにチェルノブイリ文学が書かれてもいる。

4. 研究成果

申請者は、フランス国立言語文化大学のアンヌ・バヤール=坂井氏と国際学会を共同開催した。各国の研究者と緊密に連携し、学会で意見交換を行い、それぞれの単著、または共同で『世界文学としての震災後文学』(明石書店、2021年)を刊行した。

東日本大震災からすでに11年の時が経過しているが、震災後文学研究への関心はまだまだ衰えてはいない。たとえば、2022年5月12日から14日にUCLAで行われたアメリカの日本文学研究学会、AJLS2022は、コロナ禍も踏まえて「ターニング・ポイント」を大会テーマとした。ゲストスピーカーには、震災後文学の書き手である福島出身の作家の古川日出男氏が招かれ、古川日出男氏が2020年のオリンピック開催(実際には2021年に延期)をみすえて行った、福島県内の聖火ランナーのルートを歩くドキュメント『ゼロエフ』(講談社、2021年)の朗読パフォーマンスがあった。

古川日出男氏への関心は高く、2021年3月13日には、フランス国立東洋言語文化大学(INALCO)のアンヌ・バヤール=坂井氏とパリ第七大学のセシル・坂井氏他によって、パリで「十年後の3.11 - 震災をどう描くか」(Ecrire la catastrophe: 10 ans apres le 11 Mars 2011)と題した国際会議が行われ、古川日出男氏の『ゼロエフ』のNHKテレビ版の上映があった。

海外の日本文学研究において、震災後文学は11年を経た今も重要なジャンルとして認められていることがわかる。

また震災後文学は、研究動向に付随して翻訳紹介される文学作品が多いということがある。たとえば、震災後文学の重要な書き手のひとりである作家の小林エリカ氏の『トリニティ、トリニティ、トリニティ』(集英社、2019年)は、2022年にカナダのブライアン・ベルグストーム氏による英語訳が出版された。あるいは申請者が2018年6月21~22日にパリで行った国際学会にゲストとして招いた作家の木村友祐氏の『聖地Cs』(集英社、2014年)、『イサの氾濫』(未来社、2016年)は、震災後文学の研究者として共同しているダグラス・スレイメーカー氏による英語訳が出版されている。このように研究と翻訳が同時進行することも新しい傾向である。

また文学作品の翻訳だけではなく、研究論文の翻訳も有機的に行われている。本研究の成果として2021年に刊行した『世界文学としての震災後文学』は、英語で書かれた論文の翻訳を多く含んでいる。このようにして世界の研究動向を日本語の研究にいち早く導入することで、研究交流が促されている。

また反対に日本語から英語への翻訳として、申請者の『その後の震災後文学論』(青土社)が、レイチェル・ディニット氏とダグラス・スレイメーカー氏によって英語訳され、2022年10月には、Lexington Book から Theorizing Post-Disaster Literature in Japan: Revisiting the Literary and Cultural Landscape after the Triple Disasters として刊行された。

英語訳が出版されることで、英語圏で日本文学を専攻する学部生の授業で参照することが可能になる。学部生の授業では日本文学作品も英訳が用いられることが多く、文学作品の英語訳が必要であるのはもとより、参照すべき論文が英語訳されていることは非常に重要である。学部生の授業で扱える日本文学研究が充実することは、研究者育成にとっても非常に有用である。このよ

うにして、国際的な研究交流が教育の現場へと還元される理想的な循環が行われているのも震災後文学研究の大きな特徴である。

こうしたヨーロッパ文学の動きが日本文学と連動していることで、これまでの川端康成、谷崎潤一郎、三島由紀夫などが担ってきた日本文化とは異なる同時代文学への関心が生まれた。全米図書賞に選ばれたのが、いずれも震災後文学と呼びうる、多和田葉子『献灯使』、柳美里『JR 上野駅公園口』などであるのに顕著なように、日本文学への興味は震災をきっかけに大きく変化したことがみてとれる。世界が日本の震災に注目するのは、自国の災害と結びつけてみているからに他ならない。気候変動による各国の山火事や台風などの被害が震災後文学への興味を惹きつけている。

この傾向は、コロナ禍にさらに加速したといえる。コロナ禍は世界中が同時に経験した災厄であったので、世界中の文学者がさまざまな言語でコロナ禍文学を書いた。こうした世界同時の文学のただなかで震災後文学も読まれるようになった。東日本大震災を世界の災害としてとりこんだ小説は世界各国で書かれている。例えば、Clara Kumagai による *Catfish Rolling*(Zephyr, 2023) が出版された。こうした傾向は今後も続く見込みであり、震災後文学の研究は今後も国際的に発展していくものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 231
2. 論文標題 災厄の時代にとってうたとはなにか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『文学・語学』	6. 最初と最後の頁 77 - 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 70 (5)
2. 論文標題 コロナ禍に病いをめぐって考える-小林エリカ「脱皮」の示すもの	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本文学』	6. 最初と最後の頁 38-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 54
2. 論文標題 語り得ない記憶を語り出すために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『社会文学』	6. 最初と最後の頁 14-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 24
2. 論文標題 女たちの声は聴かれたか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『ジェンダー研究』	6. 最初と最後の頁 33-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 22-2
2. 論文標題 語り継がれるレジリエンス - 震災後文学論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『臨床心理学』	6. 最初と最後の頁 232-234
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 43(4)
2. 論文標題 震災後文学論2021 - あたらしい文学のほうへ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 すばる	6. 最初と最後の頁 153-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木村朗子	4. 巻 118(4)
2. 論文標題 テロルとしての病いー小林エリカ『トリニティ、トリニティ、トリニティ』を読む	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新潮	6. 最初と最後の頁 138-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 木村朗子
2. 発表標題 コロナ禍と文学
3. 学会等名 EAAオンラインワークショップ「感染症と文学」(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 木村朗子
2. 発表標題 10年後の 震災後文学 - 小林エリカ『トリニティ、トリニティ、トリニティ』を読む
3. 学会等名 The 1st International Conference of Humanities Research Institute on Disasters at Chosun University How to Research Disaster Humanities (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村朗子
2. 発表標題 コロナ禍の震災後文学論
3. 学会等名 Ecrire la catastrophe: 10 ans apres le 11 Mars 2011 (十年後の3.11 - 震災をどう描くか) at INALCO (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木村朗子 / アンヌ・バヤール = 坂井編著他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 511
3. 書名 世界文学としての 震災後文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ラウンドテーブル『世界文学としての 震災後文学』	開催年 2022年～2022年
------------------------------------	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	国立東洋文化だ区学			